聖痕のような傷口からの雫
―― 李見心の詩におけるジェンダー意識の分析

Quintessence Coagulated from Stigmata-liked Wound
――Analyses on gender consciousness in Li JianXin's Poems

林　美茂

Lin Meimao

（中国人民大学哲学院）

School of Philosophy at Renmin University of china

E-mail:mimolin1230@yahoo.co.jp

概要：诗歌是中国社会的一面镜子，各个时期的中国诗坛动态，其中的审美倾向与情绪的呈现，都是那个时期社会问题、精神状态的反映。当今的中国诗坛，出现了前所未有的景象，写诗的人比读诗的人还要多。在这竞艳于网络与纸媒中异彩纷呈的众多诗人中，李见心无疑是一颗璀璨的星座[1)]。可以说，她是继舒婷与翟永明之后最具代表性的女诗人之一。她的诗歌，通过自己的心灵成长经验与作为女性的觉醒与生存意义的求索，为我们展现与揭示了新时期中国女性、特别是知识女性的一部心灵史。这部心灵史的特点，体现在作者对于性差意识的强烈自觉之上。随着中国改革开放的深入，传统的价值体系受到了前所未有的挑战。在整个社会的世俗化滑坡中努力坚守着自立性的性别审美，使李见心的诗歌成为当今中国白领女性的精神代言，同时也凸现了其在理想追求与现实妥协中寻找平衡的矛盾与冲突。

本文通过“青果的早熟与代价”、“圣鸟寻找天空”、“谁是她的完成者”三个方面分析与揭示进入李见心的诗歌世界的密码。其实，“早熟”是当今中国女性的显著特点，“寻找天空”更是都市女性较为普遍的情感焦虑，而“完成者”的缺失正在演变为中国社会日益蔓延的精神病态。这些现象在李见心的诗歌中基本都是通过第一人称的形式得以呈现，具有鲜明的当下性。通过她的诗歌，我们可以抵达当代中国女性的心灵秘境与思想生态。

关键词：早熟与代价，寻找天空、完成者缺失、女性心灵史，性差意识

いま、黒衣を纏い／黒夜の鏡の中に身を潜め／髪は腰まで垂れ　まるで二尺の陽光のよう／私を照らす――／有り余ってしまった青春／そして未完成の愛情。

（李見心『三十九・昔を懐かしむ』）――題言に代えて

1）李見心、女、1968 年生れ、遼寧省錦州在住、錦州市文聯に勤務。魯迅文学院と中國人民大学文学院での文学研修、第 21 回青春詩会に参加、遼寧省契約作家、中国作家協会会員。1987 年に処女作発表以来、既に長編小説『心灵捕手』、『有字天书』、詩集『初吻献给谁』、『比火焰更高』、『诗探索诗丛――李见心集』、『五瓣丁香』等を出版した。

この世界は益々世俗的になって行くにも拘らず、詩を書く人はかえて多くなっている。これは良いことなのだ、そのような人たちは風流を気取ったことではない。誤解や異様のような目でそうした敬虔な追求を見ることを我々はやめなければならない。文学、芸術は本来一種の生活態度における自我審美であり、品格や気品が保ち続けるものであるはずだ。当然また、あるひとつの事実が全く変わらないことも認めねばならない。それは、数多くの所謂詩の中で、傑作に値する作品はやはり読者の特別な厚遇を受けるということであって、それは地球上の岩石とダイヤモンドが同じ石でありながら、違う運命を辿るということに似ている。私は元々李見心という詩人を全く知らなかったが、ある友人が彼女の詩を読むように勧めてくれ、そのお陰で、この昼も夜もないような忙しさの中、生活の塵や埃に埋もれてしまいそうなどんよりとした日常において、ダイヤモンドを見つけたような収穫の愉しみを享受できたと感じた。これによって私は今一度確信した。この世界に存在しないのではない、見つけていないだけなのだ。発見が人に与えてくれる愉しみは往々にして存在自身をも上回るのである。

李見心の詩によって、彼女がこの世界に来たのはまるで生命の秘密を暴露するためだったと強く感じ、そして彼女が正にこの秘密の所有者であった。彼女の全ての詩が生命の一つ一つの細やかな部分の真相を暴き、彼女自身はその真相の裏側で気配を隠そうと思っていた。しかし、それはただ彼女の願望に過ぎなかった。何故なら彼女は自分でも知らないうちに、彼女の見つめる対象の運命、それが持つのと同じ存在境遇の中にいつも既に入り込んでしまっていることにすぐに気がつくからである。彼女はそこから離れようともがくが徒労に終わる。何故なら彼女が元々暴こうとしたのは彼女自身であり、真相を暴露するにはそれ相応の代償を払わなければならないのだ。彼女は唯、生命の真実の中の二つの核心領域、感情と審美を以て、心の赴くままに一切の文字に火を点して詩に成し、待つことなく待つ間、自分の孤独、渇望、燃焼の為に声高に叫ぶのであった。

李見心の詩を全部読んでおらず、彼女の感情の遍歴や現実生活の様子などについては更に知らないことが多いので、私の彼女の詩に対する理解が彼女の心の世界の全てを網羅できるとは決して思わない。しかし、手元にある『詩探索叢書———李見心集』は、[2)] 彼女の自選集であって、今までの代表的な作品を集まったものであると言っても過言ではない。この選集及び別の二冊『ファストキスを誰かに捧ぐ』と『火焔より高い』によって、彼女の言葉、感情、生命、思想の内包する巨大な力に震撼させられるには十分であった。そこに私は、完成されるのを待つ一人の女性を、その灼熱と矛盾と機敏の内心世界の躍動を見るのであった。彼女の詩はひとすじの傷跡、ひとつの焔、ひとやまの灰燼のようである。それは彼女が自分の生命経験を存在事実の上空で我を忘れて飛翔させる時

2）李见心『诗探索诗丛———李见心集』、太白文艺出版社、2007 年第 1 版。

に、突然の出来事が起こる度に時空の中でつまずいて転び、ある種の事実の上に残された血痕であった。それはあたかも一匹の蝶か蜜蜂が花弁の上で何度も転び、その痛みの一つ一つの瞬間に、血の滴る傷口に正に彼女が採集する最も甘い蜜であった。よって、彼女は痛みにあわなければならず、そして現実に打たれ傷ついた魂に詩の花粉を塗りつけてのみ痛みを止めることができないのだ。

一　青い果実の早熟と代償

女性として、李見心は非常に早熟であった。早熟過ぎたと言ってもよい。それは六十年代生まれの人達の宿命であったのかもしれない。私が読んだ彼女の最初の三首の作品、『自白』、『ファーストキスを誰かに捧ぐ』、『夜を恋する女の子』は 87 年から 88 年の間に別々に完成したが、当時彼女は二十歳になったばかりであった。[3] 私はこれらの作品が年頃の女の子の感情の発露だとはとても思えない。例えば、「私は長い間一枚の鏡の中に座っている／氷のように冷たく一千回もの間待つ／鏡の外のあの人と一度石破り天も驚くほど重なり合う」（『自白』）という告白の一節はそうである。[4]

鏡を見るのが好きなのは女の子の特徴であり、鏡は女性の為に存在すると言ってもよい。だからこれは元々変わったことではないが、問題は一人の年頃の女の子が氷のように冷たく待つことであり、この待つということ自身がどんな心境なのかに関心を払わずにはおられない。女の子が鏡を見ることは主に二つの状況があり、ひとつは自信がないこと、もう一つはナルシスト（自己陶酔）である。自信のない人は往々にして周囲の目を気に掛け、いつも鏡の中で自分のイメージを確認し、そうでなければ人混みの中に入っていけない。一方、自己陶酔型の人は、いつも鏡の中で自分のイメージを愉しんでおり、それは古代ギリシャ神話で水仙の花になった男の子が最後は自己陶酔の果てに迷い込んでしまうようなものだ。私は李見心とはそう親しくはないが、彼女の詩によって彼女が鏡を見ることが好きなことは分かる。詩集の中で幾度となく鏡のイメージが出てくる以外にも、その後の作品の中には『鏡が私を取り巻く』という題の詩がある[5]。彼女の詩から伝わってくるものから、私は彼女が後者、つまり自己陶酔型の女の子であることを感じるのである。李見心は自分の美しさに対して自信に溢れており、特にその長い漆黒の美しい髪は彼女に自分の美しさを発見し続けさせる。彼女の詩によっていつも彼女が美しい髪に対して注目していることを感じられる。例えば、近年の作品にあたる『耳のところで切り揃えられた髪』では彼女が自己発見の秘密を漏らしている[6]。それは、彼

3）李见心『初吻献给谁』、沈阳出版社、1997 年第 1 版。
4）同上，p.4.
5）李见心『诗探索诗丛———李见心集』、太白文艺出版社、2007 年第 1 版。P.51.
6）同上、P.28.

女が初めて列車で遠出する時、車窓のガラスの深いところで自分の美しさに気がつき、「髪の毛が肩の高さで揃っている／私はとんでもなく美しい」と表現している。自伝的な『三十九·昔を懐かしむ』という詩では、自分の成長史を四段階に分け、生まれる前、つまり母親の子宮の中にいる間を除いて、ほかは全て「髪の毛」に対する描写から始まり、髪の毛についてで終わっている。例えば、「髪は腰まで垂れ　まるで二尺の陽光のよう／私を照らす――／有り余ってしまった青春／そして未完成の愛情」のように、美しい髪の毛はほぼ彼女のイメージの代弁者であり、美しさの象徴なのである[7)]。

鏡に映し、鏡の中で待つ、もしこのように待つことが世界を彼女に向かって歩み来させるだけであるならば、問題にはならないかもしれない。しかし、彼女はそうではない。自身の美しさに対して十分な自信があるために、能動的にこうした「その虚無の夢幻」という待ちを自分でやりきってしまうのだ。よって、彼女が夜の気配の中にその待たれている「その神のような人／その人のような神」がいることを予感した時、彼女は「夜を恋する女の子」となり、夕陽と一緒に海のような夜の中へ壮烈に飛び込み、その塩辛い渇望が彼女に氷のように冷たい待ちに別れを告げさせ、鏡の外の世界に足を踏み出させるのだ。

しかしながら、結局のところ彼女はまだ若く、現実経験が足りないため、滝のような激情をもって夕陽の中から夜の海に飛び込んだ時、「自分が一匹の魚ではないことを忘れていた」（『夜を恋する女の子』）ことに気がつき、曾ての夕陽は既に別の場所の白日になってしまい、「水を離れ透明の呼吸を離れれば／死ぬであろう」がために、彼女はただ夜と共存するしかない。自らが一匹の魚となるため、彼女は「おまえは一度死なねばならない／さもなければ生きていくことはできない」と意識するのだ。これが年頃の女の子の「母親になることを学ぶ」代償であり、誘惑に我慢ができない年齢において、「水の中で愛情の為死ぬことが唯一の生き方である」ということが彼女の最初の悟りとなった[8)]。

李見心のこの悟りは彼女にとってとても大きな代償となり、感情世界の真相の早すぎる発見となった。二十歳前後の年頃の少女、はにかみ、未熟さなどはつぼみのような美しいものであり、男を引き付ける決め手となる。女性主義者達は、こんな審美は男権主義者の産物であると鼻で笑うだろう。私はそれに対してとやかく言うつもりはないが、ただ世界が男と女によって構成されていることを否定しないならば、男の完成に女が必要であるのと同じように、女の完成には男が必要であることだけは言っておきたい。であるならば、異性の審美趣向が自分の成長経験に組み込まれなければ自己は成就できず、世界にこうした性別の違いがあることを一筋に否定してはならないのである。しかし、

7）同上、Pp.23-24.
8）李见心『初吻献给谁』、沈阳出版社、1997 年第 1 版。Pp.40-41.

少女としての李見心には、その初期の詩においてこうした性別の傾向が見られず、開放、大胆、成熟が多く現れている。『ファーストキスを誰かに捧ぐ』はどんな男性でも震えさせられる作品である。彼女は最初の一句で「この世界がビーナスの美しさを認めるなら／二人かそれ以上の伴侶を持つことも黙認される」と大胆に宣言しながら、しかし「どうして平凡に捧げられよう／ルビーの秘密と財宝を軽く漏らすや／伴侶が多くとも時に安全ではなく／敵が多くとも危険ではない」ととても成熟した表現をする。たとえ「多くの人が虎視眈々とその二つ／城門の黎明を／包囲攻撃しようと狙っても／彼女はずっと口をつぐんだまま」であり、それは口の中のガムのような彼女の言葉を「誰も分からない」からである[9)]。

少女からすれば、ファーストキスは初夜と同じように神聖で、一生忘れることのない経験なのだ。多くの女性がその未熟さと単純さのために、ぼんやりと曖昧なままに最初の神聖なものを差し出してしまう。しかし彼女の慎重さは人を後ずさりさせ、「二十年生き、二十年の孤独を保ち」、ファーストキスを捧ぐべき人の為に捧げようと待ち続けるのだ。

『ファーストキスを誰かに捧ぐ』は彼女の早期の代表作であり、またそのため彼女の初めての詩集の書名にもなっている。この詩の中で、我々は一人の驚くほど早熟な少女を目にする。ここでは二十歳の少女の年齢の自覚だけではなく、更に重要なこととして彼女の一人の女性としての覚醒がみえるのである。つまり、彼女は女性として、誰もが自分が捧げるべき人になるわけではないことをはっきりと認識しており、この神聖さはその自分を「わかる」人でなければならないのである。しかし、最初はこうした神聖な他者がいなかったため、彼女がその告白の言葉は「始終告げず既にゆっくりと血液に融け込んでいき／声なき喧噪として響く」のである。

ここにおいて、我々はすぐに舒婷の『クヌギへ』を思い出す[10)]。同様に女性の人格独立の自覚を書いたものとして、舒婷の詩が表しているのは一種の浪漫主義の感情であり、女性としての理想人格を宣言的に率直に表現している。一方、李見心のこの詩は正真正銘のモダニズムの情緒であり、自己の女性としての独立意識を啓示的に示しつつ吐露しきっている。詩の内容から読み取れた権利意識と独立性の目覚めは彼女の年齢を超え、彼女と同年代の全ての人が言葉を失い青ざめてしまった。李見心のこの早熟は先ほど話した「悟り」の結果から来るものである。まさにこの早熟のため、彼女はまだ二十二歳に満たない時、既に自己の女性として避けることの出来ない「人に言えない痛み」を体験することとなった。これは非常に恐い結果であり、この後彼女は自分の意識と感情の包囲に対してぬぐい去ることの出来ない境遇の目覚めを運命づけられるのであ

9）李见心『初吻献给谁』、沈阳出版社、1997 年第 1 版。P.2.
10）舒婷『舒婷的诗』，人民文学出版社，2000 年 7 月第一版。Pp.117-118.

る。

90 年 3 月に書かれた『女の傑作』[11] は注目に値するもう一首の初期の力作である。この詩は我々に彼女の女性としての完成の全過程、そして完成後の人に言えない痛みと空虚を漏らしている。詩は三つの部分に分かれており、まず最初に彼女は問いの形で「最初の母親は私ではないと誰が言えようか」と自分に潜む不安を覆い隠す。これは他人に質問しているようであるが、実は自分に問うているのである。処女から母親になるへ敷居を越え始め、不安の為「神の視線を避け」なければならず、それが「絶望への歩み」になるであろうことが分かっても、彼女はやはり「鳥のように天空に倒れかかり／冬空から得られる意外な優しさを懐きつつ／一本の肋骨の姿勢で取り囲む／あなたの胸懐を大海を複製し／予感を春の光に変える」のである。これが第一部分の内容であり、自分が「最初の母親」に触れようとした心情と予感を書いている。続いて第二部分に入ると、女性として完成される細やかな感覚が書かれている。即ち「果実は空中に掛けられ　土地に対し／脅威を成し／一種の下降の姿勢で私のように若く／果物のように透明な心で／渇望する　まぶしく耀く視線を／果物ナイフのように　清らかに耀き／自己を切り開く　跳ね飛ぶ／甘い痛みが　時が経っても止まず……／一種の上昇の欲望は私のように永遠であり／果汁の濃い紅に任せ　黎明と黄昏に塗りつける」と。この中で使われている象徴的なイメージは、「空中」と「土地」、「下降の姿勢」と「上昇の姿勢」、「果物」「切り開く」「甘い痛み」「果汁の濃い紅」等であり、ここで対応している事物は、私が具体的に説明しなくても一目瞭然である。男女の性に関して、このように細やかな描写で表現するのは、全く素晴らしく感嘆するのみである。問題は第三部分であり、彼女は「土地と天空が分かたれた瞬間」すぐに自分がどれだけ「両腕を交差させ」ても、ここに残された「漏れ穴」を塞ぐことはできず、この「致命的な傷口」からとめどなく「世界で一番清らかな膿が流れ出て」、「性別のない悲しみが流れ出」、このようにして彼女は処女から女性への昇華を遂げ、本来ならば美しく飛び越えていくはずのところを、彼女は自分が「少女の最後」として、それと別れた後の痛みに気がつくのである。

この詩は李見心が自分の初夜に対して詩的に描写したものではなかろうか。深く心に焼き付いているために、その描写がこれほど真に迫っているのである。そこには躊躇やはにかみ、恥ずかしさは見られず、積極的に泰然とかつ大胆に自分が受けた少女として最初で最後の痛みを表出している。最初、彼女はこれが「受難」だと認めているが、後でやはり「悔い改めようとは思わない」と率直に言っている。更にこれは自分が女として完成する生命の傑作だとまで考えている。『ファーストキスを誰かに捧ぐ』での彼女の感情に対する慎重さを考えれば、李見心がその神聖を捧げる対象を決めたのは心を込

11）李见心『初吻献给谁』、沈阳出版社、1997 年第 1 版。Pp.65-67.

めて選んだ結果だというべきである。というのも彼女は曾てむしろ鏡の中で待ち、待つ間にその言葉を血液へと融けつつも簡単に口に出すことはなく、それは即ちただの「愛している」という言葉やファーストキスであったが、初夜であればなおさらである。よって、これで捧げたことの中で得たものはきっと「痛み」よりも大きく、であるからこそ「傑作」と命名したのだ。

しかし、彼女がどれほど自分に何が必要なのかをはっきりし、どのような男が自分の飛翔に値する天空かを知っていたとしても、たった今思春期の年齢に踏み出した彼女は、肉体は既に成熟し、欲望は理性を凌駕し、「誘惑を受けやすい年齢」であったのである。彼女のその血液に融けた無声の叫びはまさにこのような状況のもと、「甘い痛み」の中で初めて流れ出た。しかしながら、そんな良いことは長続きせず、彼女はすぐにこうして捧げることの真相に気がついた。半年しか経っていない同年九月に完成した『聖なる鳥の天空』[12] において、彼女は既に「私の心／それは既に一滴の涙の重ささえ背負うことはできない」と告げている。それは「私は彼の吸い終わった一箱のたばこを数えながら／それは私が一晩の間に失ってしまった白蝋と節気のよう／彼は最後にぎこちない優しさを一言漏らし／親しいのに見慣れない」からであった。彼女は自分と捧げたその人との間に、決して炊きあげることのできない「生煮えのご飯」のような気まずさが存在することにすぐに気がついた。本当は一羽の鳥として、彼の天空の中で「一生ゆったり」したいと思っていたが、今はただ「軌跡のない雲間で／私は文字によって傷つけられたふたつの眼を見る」だけしかできないのだった。

このように、早熟の詩人は本来なら若さを謳歌し、天真や爛漫や憧憬といった段階を自由自在に駆け抜けているはずであったが、しかし生命の「漏れ穴」を見るのが早すぎたため、感情の悲劇の真相を発見してしまったのである。彼女は自分の中で完成されたのは肉体だけであって、魂の飢餓は手相のように、この後の毎日を覆い尽くし、乾燥した夢の中で渇望することしかできないのだ。

二、聖なる鳥は天空を探している

李見心の詩の中で、「鳥」という言葉と「天空」とはいつも同時に現れ、一度だけ「火の鳥」（『紙婚』）[13] という言葉でたばこ好きの男性を暗喩していた以外は、「鳥」は基本的に彼女自身の女性としての象徴であって、「天空」は彼女が探し求める自分を自由にのびのびさせてくれる男性である。ただの偶然の一致なのか、それとも潜在していた遺伝子がインスピレーションに呼び覚まされた故なのか、彼女のこの言葉からイメージ

12）李见心『初吻献给谁』、沈阳出版社、1997 年第 1 版。Pp.70-71.
13）李见心『初吻献给谁』、沈阳出版社、1997 年第 1 版。P.107.

したもので、私は中国古代神話「精衛填海」の中で女性が精衛という名の鳥と化した、その鳥と水との関係を想起したのである。

今に至るまで、多くの学者はいつも自分が生きている時代の価値観から出発して、「精衛填海」（精衛、海を填む）の物語は人類が自然を畏れない抵抗の精神であるとして理解しているが、これは全く本筋から大きく離れている。実のところ、これは中華大地先住女性達の生殖崇拝の巫術文化の変形である。その中で女の子が東海で遊んで溺れ死ぬが、これは少女と水神の聖なる性交（沐浴）と貞操の喪失（＝死）の過程を指し、その後精衛という鳥と化して石をくわえて海を填める行為が、これは性行為の動作を抽象化したものであり、つまり生殖崇拝の巫術場面の描写をしているのだ[14)]。李見心はその初期代表作のひとつである『夜を恋する女の子』の中で「おまえは一度死なねばならない／さもなければ生きていくことはできない」と、水中での死を以て処女が差し出した初夜をはっきりと象徴させている。彼女が詩の中で常に使う死のイメージは、基本的に自分が女性として性愛を経験し、完成された記憶としての暗喩である。そして彼女はこうした「死」の中から、自分が「魚」ではなく「鳥」であるという自我意識を確立させるのである。

92年の『栗色の小鳥』の中で李見心のこうした象徴のイメージが指すものを明確に捉えることができる[15)]。これは典型的な自画像であり、彼女は全く隠すことなく自分が一羽の「軽く信じそして深く疑うのが好きな鳥」であると言い、この詩は基本的に李見心の性格と本質的な特徴を表現している。彼女が傷つくのはこのように「軽く信じ深く疑う」ところにあるのだ。それは、「軽く信じ」ることによって人は物事の動機を無視し、また「深く疑う」ことによってひとつひとつの結果を信じなくなるからであり、こうした矛盾が彼女の生き方の本質となってしまっていたのだ。この詩は基本的には自分の過去の経験を省察する中で書き上げたものだ。彼女は自分をつぶさに見詰め、鏡の中で待つことにしている自分に別れを告げてから、すぐに「飛んで飛んで　あなたからだんだん離れてゆき／一人で天空に海抜を刻み……／夢によって痛めつけられた翼をおさめることなく」、彼女は自分が黙々と受けいれられることを渇望して、「狩人よ　あなたは千回もきれいに洗った手をどのように差し出し／丁寧に彼女を捧げ持ち／まさに破裂しようとする正午の／真紅の陽光の中　黙って何も喋らない」と呼びかけるのである。ここで注意しなければならないのは、「千回もきれいに洗った手」というところだ。先ほど見てきたように、彼女が自分を差し出して痛みを持ち帰ってから、潔癖症を患ったようだ。例えば、『寝言』の中で彼女は「二匹の猫の叫びが　僅かな指紋もない夏を踏

14）この問題の詳しい内容に関しては、拙論『「精衛填海」神話における生殖崇拝文化の原型の分析』（『愛知論叢』59、60号）を参照のこと。

15）李见心『初吻献给谁』、沈阳出版社、1997年第1版。Pp.81-82.

みつけてしまった／その時私は妊娠したような気持ちの悪い嘔吐感を覚えた」と書いている[16]。この時、猫の発情する鳴き声を聞いて、彼女は興奮するのではなく、嘔吐感に苛まれたのである。なぜなら？その時彼女は「生活の中で男は誰でも鋭利な凶器を隠し持っている／これらは性別の偏見として切りかかる以外に求めるものは無く／女の肉体はふんわりと柔らかいスポンジのように空洞で何もなく／誰か喉が渇いたら誰が搾り　ただ処女の血は既に流れて失われたことを聞くな」と、すでに男を信じていなかったのだ。彼女は、自分の神聖なファーストキスを捧げるべきは「最後の男」であり、「死神」であるという残酷な現実を知ってしまった。この為、彼女は「暗い夜に黙って咽び泣き」、なのに「全ての人は大声で笑う」のだった。

まさにこの為、彼女が最初に見た「真っ赤な果汁」「最も純潔な膿」はもう既に甘い愛液ではなく、彼女を苦しませる苦汁であるのだ。もともとただの「何のいわれもない」小鳥は、この世界の中で「家なき子」となってしまった。そして彼女自身に属したのはただ「身体を長く洗い笑を短く零れる」だけだ。ここで私達は再度李見心のもう一つの習性、プライバシーに出遇った。彼女は鏡を見るのが好きなだけではなく、入浴も好きなのだ。彼女が生活の中で毎回「出番」の時、必ず「自分の身体をきれいに洗って」（『出番』）いる[17]。だから彼女は、自分に差し伸ばす狩人の手が必ず「千回もきれいに洗って」清潔であることを求めるのであった。

では、その後李見心は自分が待ち望む清潔で、自分に伸ばし、守ってくれる手を見つけたのであろうか？彼女に自由に翼を広げさせ、しかも依然として翼よりも高い天空、彼女に大地のように広々と果てしない天空は現れたのであろうか？

彼女が最初に「倒れかかた」その一角の天空との間は不調和に終わり、その感情が「生煮えのご飯」のようなものだったと気づいた『聖なる鳥の天空』と同じ月に、彼女は別の『海賊を懐かしむ』という詩を書いているが[18]、その中の物語が畢竟同じ男なのか、それとも別の男を指すのか、私は軽はずみに推測する勇気がない。というのも、ここで表されている感情の陶酔は、上で分析したような「親しいのに見慣れない」気まずさ（『聖なる鳥の天空』）とは全く違い、一種の触れることができそうなほど、骨に刻み込まれたうっとりするほどの満足感だからである。

16）李见心『初吻献给谁』、沈阳出版社、1997 年第 1 版。Pp.109-110.

17）李见心『诗探索诗丛———李见心集』、太白文艺出版社、2007 年第 1 版。Pp.3-4.

18）李见心『初吻献给谁』、沈阳出版社、1997 年第 1 版。Pp.113-114. 実際、この詩を書く半年前、李見心は同じ題名の散文詩を書いたことがある。ここで言う「海賊」は彼女のファーストキスを捧げた最初の人であろう。散文詩には「私の苦く甘いファーストキスを盗んだ人は誰なのか」という自白がある。この散文詩は『ファーストキスを誰かに捧ぐ』と『女の傑作』と同じ月に完成した作品で、二首の詩の下書きのような心情日記の内容になっている。

「大海を征服しようとする勇士　それはあなた／溢れ出るほどの力を冬の空からもらう／私の背後から春の腕が伸びる／風のように抗うことのできないくらい私を取り囲む／戦慄するほどの優しさは下へ移る光芒をもって／ある隠された痛みを貫く／手紋のように／私の一生を必死に覆ってしまう／一粒の海賊の涙　全ては世紀の／愛／食い違った時間を超える／ゆっくりと果てしなくゆっくりと果てしなく／私の帰るところなき魂を／奪い尽くしてしまう」（『海賊を懐かしむ』）

同じ月に感情経験の全く異なる二つの作品を書いていることにはいろいろと疑念を懐かずにはおれない。しかし当然彼女のプライバシーなのでこれ以上深く探ろうとは思わない。私が指摘したいのは、この詩が唯一彼女の感情の陶酔と満足を表現している以外には、これ以後のどの作品においてもこのような感覚は見られないということである。これは91年以前であり、彼女が男を信じないと発言する（『寝言』）以前の作品だった。これ以後の作品の中には､依然として彼女の矛盾に満ちた情感と出会うことができるが、そうした作品において、『火焔の後』の中で彼女が幾度か燃え尽きた痕に触れ得る以外、他は全て基本的に彼女の愛情観、価値観の吐露であり、愛情は仮説となって彼女の審美と思考の相互作用の道具に過ぎないのである。例えば『私が狂った女だったらよかったのに』、『私を見て』、『残りは全部あなたのもの』、『肉体を着ずにあなたを愛す』、『模擬愛情』、『言い出したら愛情ではない』、『あげるなら一番いいものをあげる』、『私に夢を見させる人』等、皆そうだった。たとえ『火焔の後』においても情愛の痕を完全に抽象化、概念化して、ただ「火焔」という強烈なイメージが残っただけで、残された「灰燼」によって彼女が何度もうっとりするような中で魂が昇天したことがわかるのである。

このような変化によって我々は李見心の成長の軌跡がわかる。彼女は元々理想を抱き真剣であったのが、だんだんと闊達で開放的になり、さらには自らを欺くようにもなったのだ。もしかしたら、これも彼女の女としての真の成熟を意味し、それは早期の青い果実のような中途半端な早熟とは違うのかもしれない。しかし、このような成熟の結果は彼女にとって決して良いことではなく、彼女は全てを見透した後退廃的になっただけであり、さもなくんば、自分の魂のその「漏れ穴」を埋めるには足らなかったのである。例えば、

「愛する人よ、世の中には真実の愛はないのだから／愛情を真似てみましょうよ、いい？／あなたは私を愛しているふりをして、私はあなたを愛しているふりをする／……ふりをしている中で、私達は真実の震えと純粋な激情をともにできるわ／それは本当の愛よりもっと長く続くのよ」[19]（『模擬愛情』）

19）李见心『诗探索诗丛———李见心集』、太白文艺出版社、2007年第1版。P.13.

これは近年の作品である。この作品と早期の『ファーストキスを誰かに捧ぐ』の間の変化は一目瞭然である。情感に対する早期の神聖さと理想は、ここへきて世の中を茶化す不遜なものへと変化したのだ。そして『模擬愛情』よりも更に一歩踏み込んでいるのが『十一月の愛情詩』であり、そこで表現された初期作品に対する反逆は強烈である。即ち、「十一月／ただ恋愛だけをしたい／相手は誰でもいい／……見知らぬ人と遇うたびに／一目惚れし、老いるまで愛し合う」という告白である。ではなぜ彼女はこんなにも大きく変化したのであろうか？まさか最初に捧げたことの失敗によるものだけであろうか？問題はそれほど簡単ではない。当然彼女の最初の理想的情感が破れ去ったことによる結果は否定できないが、しかし、それは根本的な原因ではなく、より深い原因は彼女の成長経験に遡って、そこから求められるはずだ。

一度目を経験した後、元々疑い深い彼女が更に敏感かつ理性的になったのは確かであり、例えば彼女は「私はあなたを見ていない／だけどあなたが私を見ているのは知っている／私の年齢の破綻を見てとり／私の睫毛の上に戦慄の灰を見出す」（『私を見て』）と言っている[20]。彼女も理性の束縛から逃れることができればと願いはしたが、「私が狂った女だったらよかったのに／でも理性はもうキリストを貫く釘のように／私を貫いている／けっして緩むことなく」（『私が狂った女だったらよかったのに』）[21]というように、理性はかたく彼女を捕らえて放さない。理性によって彼女は、「あげるなら一番いいものを、一番最初のものをあなたにあげる……／……愛するならこれ以上ないくらい完全なものをあなたにあげる……」（『あげるなら一番いいものをあげる』）と思っていた[22]。しかし彼女にとって「一番最初のもの」は既に無く、「完全なもの」はもう壊れてしまっている。これに対し彼女は、「四十歳になる前、私は自分が生きてきたとは認めない／四十一歳の女こそが一歳の女」（『元叙述・年齢』）[23]、「風は今まで声を持ったことなどない／私達が今まで生まれていなかったように」（『風は今まで声を持ったことなどない』）[24]、と過去を否定することによって自分を新たに始めようとした。しかし彼女は実際には成し遂げることができず、「私自身は瑕疵のあるひとつの詞／どんなに飾っても／その内心の漏れ穴を覆い隠すこともできない／心が跳ねる度に　それは血を流し止まらない」（『字詞』）というように、忘れ得ぬ過去と残された現実は彼女の良知を覆い隠せないのである。

現実の中で多くの人が初めての失敗或いはそれに似た経験をしているであろうが、李見心がこれ程までに深く傷ついたのは、彼女の成長における苦い経験と関係があるはず

20）李见心『比火焰更高』、中国文联出版社、2003 年第 1 版。P.44.
21）同上、P.42.
22）李见心『诗探索诗丛———李见心集』、太白文艺出版社、2007 年第 1 版。P.30.
23）李见心『比火焰更高』、中国文联出版社、2003 年第 1 版。P.196.
24）同上、p.13.

だ。彼女の作品から判断すると、「白雪が天から降る／母はウェディングドレスを着て天の宮殿からゆっくり歩み／舞い降ちる大きな雪片が乳のように取り巻く／あなたの唇／あなたは赤ん坊の寒さと餓えを感じている」（『白雪が天から降る』）[25]、また「私は母に会ったことがない／彼女は私の記憶が始まる前に逝ってしまった／いや私の前世よりももっと早く」（『元叙述・両親』）[26] と言っているように、李見心の母親は早くに亡くなっている。母の愛がないとき本来ならば父の愛でそれを補おうとすることができるが、「私は父からは虚無を得る以外　何も得られない／父が私を折りたたんで凧にし天空へ飛び立たせ／糸を持っていた手を突然放したとき／私はこの世界との関係を断った」（『元叙述・両親』）[27] のように、彼女の父親に対する記憶は全く心温まるものではない。こうした肉親の情の欠如が彼女の早熟における「軽く信じ深く疑う」性格をつくったが、たとえ女の子から女性への完成を経験しても、深いところにある肉親の情への渇望は全く眠ってはいないのである。よって、この詩の中で、彼女が街角で花を売っている婦人を見かけた時、あれが前世の母なのではないかと思い、カーテンが揺れるのを見て、それが父の魂なのではと思うのである。正にこうして肉親の情の加護を渇望し、そしてあるべきはずの肉親の情の加護がないという成長の経験の為、彼女は自分を取り囲んでくれるもの（「囲城」＝婚姻）に大きな期待を抱くが、一旦それが堅固なものでないと気づくと、すぐに恐れを抱き、些細なこと或いは本来気にする必要のないこと全てが彼女の激しい感情を失わせ、取り囲むものの中に入るのを本能的に拒絶するのであった。例えば、「「停電だ、いくら紐を引っ張っても、電気がつかない」／あなたがこの言葉を言い終わった、夕陽が私の手の隙間の燃焼を止めた……／そのとき私はやっと気がついた／私が愛したことはなかったと」（『日記・8 月 12 日　夕焼け雲』）のように[28]。こんな最低限のこともよくできない人が、どうして私の愛すべき人だろうか？そして「一人の老いぼれた人／私の父よりも老いて　私と日増しに親しくなる／私は彼の年齢を心配する／私の愛情に堪えられないのではないかと」（『日記・10 月 24 日　雨』）というのだ[29]。これはきっと自分より早くこの世界を離れてしまう人なのに、どうして私が求めるような加護を与えきれるだろうか？このように、彼女の成長の経験によって、彼女の感情の理想が条件付きであることが決定づけられ、我を忘れて突き進むことはできないのだ。ここで私たちは「私の唯一の欠点はキスの時に心が散漫になることだ」（『真実の接吻』）という梁小斌の詩を思い出す。彼女の感情は火のようにはっきりし、また氷のように熱く、よって彼女は最終的に自分が実現しなければならない理想、或いは求

25）同上、p.83.
26）同上、p.199.
27）同上、p.200.
28）李见心『比火焰更高』、中国文联出版社、2003 年第 1 版。P.202.
29）同上、pp.202-203.

めるべき且つ欠けているその人が誰なのかが、「あなたはちょうど神のようにまったく肉体を着ていない／そして私にこんなにも肉体を着ずに／……あなたを愛させている」（『肉体を着ずにあなたを愛す』）[30] というように最終的にはっきりするのである。そして彼女は自分に夢を見させているその人「自身がひとつの夢」（『私に夢を見させる人』）であることを自覚している[31]。彼女の理性がこうした感情の真相を突き抜けた後、彼女は現実の中ただいろいろな仮説の中で生きるしかなく、成り行き任せに遊ぶのも、世事を軽んじるのも、果ては放縦に振る舞うのも、全ては自分の感情理想の崇高な追求からくるものであった。

ここまで読み進めると、李見心はすでに移り気の多い浮気な女になってしまったと感じるであろうが、事実はまったく逆で、彼女は今に至っても自分の理想を捨ててはいないのである。彼女は、自分の欲望は「冬至の夜よりも／真っ暗で、膨張し」ているが、「少しも森林で覆われていない山の斜面が／彼女を勢いで倒れ込ませ」、「彼女は流浪して／舞い落ちる雪のように自分を見失いたいと思っても／大雪が封印し／彼女は自己の内心に向かって歩み出すしかない」と言っている。これは彼女のもう一枚自画像『見心の冬』での一節である[32]。この「内心に向かって歩み出す」感情の傾向によって、彼女がただ詩の中でのみ自分の生命を燃やし、文字を使って渇望を声高に叫び、「大雪が封印し」ているため現実の具体的な行動は何もないということが分かる。もしこうでなければ、我々が今更に多くの、早期の作品よりも描写が細かく情愛、すなわち生命を審美する詩が読みうるはずであろう。だが、上で言ったように、『聖なる鳥の天空』及び『女の傑作』、『海賊を懐かしむ』より後の作品の中に、このような「傑作」を見出すことは出来ない。なぜならば、生命の営み、すなわち男女の交わるという臨場経験はないが故に、彼女はただ文字の中で「存在不可能なものを存在可能にし」（『元叙述·日記·11 月 19 日　雪』）、「魂の方法で肉体を避ける」（『元叙述・年齢』）ことしかできないからである。

三、誰が彼女の完成者なのか？

ここまで李見心の詩が呈示する彼女の感情と生命の審美経験、失敗の過程、それによる結果を分析してきた。しかし、まだひとつの重要な問題が未だ議論されずにいる。それは彼女が最初に捧げた後の悲劇的な結果が生まれた原因は一体何だったのかということである。この問題に関して更に深く突き詰めていく必要があるであろう。

我々は彼女の作品の中から、三つの原因が彼女の感情悲劇の必然性を構成しているこ

30）李见心『诗探索诗丛———李见心集』、太白文艺出版社、2007 年第 1 版。P.9.
31）同上、p.35.
32）同上、P.45.

とを見出すことが出来る。一つめは、彼女が凡庸を拒絶し、感情が「石破り天も驚くほどに重なり合う」という理想の愛情を追い求めている事である。二つめは、性別の自覚と反逆の衝動である。三つめは、世界の裏側にある真相を見透せる思想の深さが彼女の弱点になっており、発見する度にその代償を払わなければならないということである。

1、先述した『寝言』の詩において、彼女は「後ろから誰かの手が私を凡庸という落とし穴に突き落とし／さらに日常の塵や埃を堆積し私を深く埋もれさせた」のように、自分と相手の感情の亀裂の真相をはっきりと打ち出している。こうした凡庸さによって、彼女は夜毎一種の恐怖によって夢から覚めさせられるのである。昼間は月が雲間に隠れるように人混みの中に紛れることができるが、夜になると、恐怖が彼女を「はっきりとした痛み」へ誘うのである。また『ファーストキスを誰かに捧ぐ』では、更にはっきりと自分が「凡庸に捧げる」ようなことはしないと宣言している。その後や近年に至っても、彼女のこうした態度は一貫している。例えば『春にとがめだてをする』[33]、『残りは全部あなたのもの』、『別人の賛美詩』などは[34]全て彼女が凡庸を拒絶する心情の吐露である。

男権主義が君臨してきた数千年の人類の歴史と現実の中で、女性が一旦凡庸さを拒絶すれば、その悲劇的運命はほぼ決定的である。人類が現代社会に入り、至る所で男女平等が唱えられるが、しかしこうした叫び自体が不平等な現実が未だに存在していることを意味している。確かに今は昔と違い、恋愛や結婚の自由を求めることにおいて女性は平等に相手を選ぶ機会を獲得した。しかし、機会が平等になったからといって、結果が必ずしも平等になるとは限らないのである。恋愛の段階において女性は男性と同じように自分の好きな人を自由に選ぶことはできる。しかし一旦結婚し、家庭に入ると、男は往々にして一方的に女性に平凡に捧げることだけを望み、多くの女性もまた男に従属するものとしての境遇に甘んじるのである。ここでは明らかに機会と結果の乖離がおきており、つまりそれは機会における平等が決して結果における平等に繋がるものではないことを意味している。そうなると、不本意にも日常の塵や埃に埋もれてしまった李見心にとって、彼女の理想的な捧げ方はただの夢であるのだ。彼女は第二冊の詩集である『火焔より高い』の中で、ある作品を通して、「死ぬこと以外で、夢は神が人に与えた第二の平等である」（『元叙述・季節』）と鋭く指摘している[35]。死ぬことと夢を見ること以外に、男女間の真の平等の実現はほぼ難しいとも言えるであろう。

2、おそらくこうした疑問や気づきによって、この時期の李見心の詩からは、性別の問題が彼女の思索におけるひとつの傾向になり始めている。更にはこの以降の作品の中

33）李见心『比火焰更高』、中国文联出版社、2003 年第 1 版。P.1.
34）李见心『诗探索诗丛———李见心集』、太白文艺出版社、2007 年第 1 版。P.5. 、P.6.
35）李见心『比火焰更高』、中国文联出版社、2003 年第 1 版。P.197.

で彼女が男性の人称である「彼」を使っているのに気づく。例えば『室内生活』[36]、『一首の詩主義』[37]、『八日目』[38]、『男の子』[39] 等であり、いくつかは他人を観察したものであったり、他の人に書いてあげた詩であろうが、『男の子』は注目に値する詩である。この詩の中で、彼女は「私はあなたの想像の中の男の子、あなたは私を飼育し／それは死よりも太っている」と言い、自分を母親の潜在的な願いとして想定している。また、「誰も時間の追っ手からは逃れられない、死者でさえも／私以外は、何故なら私はまだ生まれていないのだから」、「あなたが身籠もった時かさらにはもっと前から／私は全く自分の性別を疑ったことはない／あなたを失望させてもいない／“ふたつの小球は転がっている”」等、こうした常人では及びもつかない想像力は、彼女の潜在意識にある別の性別（男性）への願望という交換仮想に基づいている。

詩を書く人にはよく同じような創作経験がある。一首の詩において、まずひとつの人称と性別を定め、その後自分の観察と叙情の角度或いは役柄を選び、その詩が語る環境を創り出すのである。人称や性別が違えば、その審美の角度や感情の傾向も異なるため、表現上の言葉の特徴にも違いが出てくるのだ。これらの作品の中で、李見心はこのように性別を変えた後の審美の違いを意識的に区別しているわけではなく、さらには部外者として「他者」を観察するような姿勢さえ取っている（例えば、『室内生活』、『一首の詩主義』はまさにそうである）。しかし、『八日目』からは、「八日目、男の寂しさが背骨のような曲がった女を作り出した」、「八日目、彼は退学届けを出した、理由は私を見て心が痛んだから」と言っているように、すでに男女の性別の違いを明確に区別し始めている。ここでは、彼女は女性が男性の感覚の中で生きていく境遇と運命の中にいるのを、はっきり示しているのが容易に見て取れる。

李見心の詩に存在する上述のような感情と思想の発展過程は、彼女が女性主義思潮の影響を受けているのではないかと思わずにはいられない。それに関連した思想の手がかりがまったくはっきりしないため、もしかしたらそれは彼女が女性の人格的独立を求めた過程における無意識の産物であったのかもしれない。しかし、こうした追求の過程は、20 世紀 60 年代アメリカで興った女性主義運動の発展過程と期せずして一致していると言わざるを得ない。女性主義運動はアメリカの富裕層の婦人達が平凡を拒絶し、独立、平等な生存権利を求めたところから興っている。これに伴い、権利平等の問題の中に存在する機会の平等と結果の平等が乖離している現象の問題が突き詰められるようになり、近年はその重点が基本的に性差問題の研究と指摘に移っている。上述の李見心の詩

36）同上、P.83.
37）同上、P.20.
38）李见心『诗探索诗丛———李见心集』、太白文艺出版社、2007 年第 1 版。P.26.
39）同上、P.62.

に表現されている女性独立意識としての発展は、正にこうした三つの段階をかすかではあるが経験してはいるのではないだろうか？

男権主義の歴史の中で、男は女に凡庸さを求める以外、更に女が自分の審美趣味に合うように求めた。実のところ、我々が現在認める女性の美しさといったもののは、ほとんど男が与えたものであると言われている。例えば、男は恥ずかしがり、慇懃で感情を内に秘めた女性が好みであるが、女性はほとんどその審美趣味を自分の美しさの標準としている。しかしながら、李見心は意識的にこうした伝統に反発し、彼女の作品が表現するものは熱烈で大胆であり、あるものは人を引かせるほど開放的である。男女関係の嘘偽りの中で生きていく男達の前にいることに慣れていく中、彼女は自分の生命の現場における細かく真に迫った感情と肉体の審美の真相を余すところ無く文字で描写している。これによって彼女は、自分の詩によって「傷つけられた眼」(『聖なる鳥の天空』)を見ざるを得なくなり、正にこうした傷によって、彼女と男の間に現れる「見慣れない」亀裂が始まるのだ。

３、上の二つ以外にもうひとつ無視してはならない重要な原因は、彼女が物事の現象からその背後にある真相を見ることができるという鋭さを持っていることである。彼女は簡単に目の前の物事を信用したりはしない。それは彼女が「私達が見ている生活は生活ではなく／生とは反対のものだ」(『風は今まで声を持ったことなどない』) とか、「聴くことの出来る風の音は風の音ではなく／目に見える寂しさは寂しさではなく／触れることの出来る愛情は愛情ではない」(『八日目』)と考えるからである。それ故、彼女は往々にして物事の裏面、背後から、ひとつひとつの問題に深く隠されている不道理を暴き、既定価値観のペテンをさらけ出させる。こうした特徴は彼女の詩の中に具体的に表現されており、反義語の多用と巧妙な使い方、或いは相対する二つの事を対立的に叙述することを通して、一句の詩の中または一段落の中において、思想と内包の巨大な張力が生まれ、それらの詩に途絶えることなく予想外な深い思想と芸術的効果を発揮させている。こうした詩句の例は枚挙にいとまがない、例えば

「私は死を誓って敵を愛し／永遠に生き続けながら愛する人を恨む」(『ファーストキスを誰かに捧ぐ』)。「親しさをもってあなたを遠ざけ／すっかり開放しながらあなたを拒む」(『元叙述･季節』)。「あなたが後悔しないと言った時すでに後悔がやまない」(『字詞』)。「ちょっと閉じるだけのやり方で開き／……大きく開け放つやり方で覆い隠す」(『バラの秘密』)[40]。「不存在のような真実／真実のような虚空」(『出番』)。「それは近づいてきて遠くなり　もう届かないほど遠い／それはさわやかにぼんやりし　世を隔てているよう／それは真実に至りて真を失い／存在に至りて不存在になる」(『蝶々、ひと

40）李见心『比火焰更高』、中国文联出版社、2003 年第 1 版。P.167.

つの詞として』）[41]。また「栄光の恥辱」、「あざやかな腐乱」、「芳香の臭気」（『バラの秘密』）等のようなレトリックで言葉を巧みに組み合わせる想像力を見せている。

このように矛盾した事物の間の意義的衝突を通し、対義語を並列して示したり対比させながら使うことによって、彼女の作品は意外な深さを持ち、彼女の思想はたゆみなく深く展開していった。李見心の詩句での言い方で言えば、それは「二つの相反する詞をください／天秤のように世界を公平にしてみせる」（『字詞』）であった。これはそれほど考えもせずに口から出た言葉のようであるが、実は非常に重要な意味を持っている。李見心はここに人と人の平等問題の考えを含ませているのだ。反義語同士が絶対的平等かつ密接な関係にあるように、男と女もそうであり、意義的な面からしても働きの面からしてもその関係は平等かつ密接なのである。二種類の相反する事物の間に対立や矛盾の関係が生じるのは、まさにそれらの力関係が均等であるからだ。

彼女が物事の表面を透かして観察することに長け、また物事の一面的に理解をせず、その裏に隠された意義の真相を掘り出し、それと関係しまた相反する意義と作用を見つけ出すが故に、彼女は必然的に自分が不平等な環境にいること、つまり男の付属物として平凡と日常の中に生きるという境遇に甘んじなくなった。こうした境遇から抜け出す為に、彼女は性別の差を考え、自分の女としての運命を考えるのだ。彼女はいろいろな事物を逆向的に省察する中で、ひとつひとつの生命に隠されたもう片方の真実に触れていくのであった。これは一方では彼女の思想に冷静さと深さを与え、もう一方ではこの発見の為に彼女に大きな精神的代償を払った。彼女は「耐え」なければならないと自分に言い聞かせ、さらには「もう少し耐えて／そしたら羽が生えて仙人になり／蝶のように飛び立つ」（『黄昏に耐える』）[42] と夢見ている。しかし、実際には自分が見せかけの事実の上で感情を費し、空虚を飾り立てることに耐えられるはずもないのである。

しかし、ひとつ無視できない事実は、成長して行く李見心の詩には、彼女の愛すべき人がだんだんと人間性から神聖性を持つように移行していくという現象が日増しに顕著になっていったことである。もしも初期の『ファーストキスを誰かに捧ぐ』でのその「誰か」を、神聖的な存在として理解してよいものだとすれば、彼女が最初から自分が捧げようとしたその対象はこの世界に存在しないことになり、であるならば、彼女が愛したいその人は必然的に永遠に生まれることはない。「最初の母」と「最後の女」などのメタファーなイメージからは、すぐにイブの身分と役柄を思い出すが、初期の李見心は基本的に肉体と人間性､動物性を保ったまま彼女のもう片方を探していた。しかしその後、『元叙述』、『私の身体の周り』[43] 等では、彼女は肉体を保った存在としての、また「漏

41）李见心『诗探索诗丛———李见心集』、太白文艺出版社、2007 年第 1 版。P.31.
42）李见心『诗探索诗丛———李见心集』、太白文艺出版社、2007 年第 1 版。P.15.
43）李见心『比火焰更高』、中国文联出版社、2003 年第 1 版。P.50.

れ穴」を持った存在としてのいろいろな出会いを省察、反省し始め、その後変化が起きるのである。『私の身体の周り』では、はっきりと肉体に対する抵抗を表現し始める。例えば「何処に行っても肉体を抜け出せない男と女」、「彼らはいちゃいちゃしないと続かないし／いちゃいちゃし終わっても続かない」といったように。そして、これより後の作品の中では、神聖性のイメージや叙述的暗示がだんだん多くなっていくのである。彼女は、詩を「清らか過ぎて生まれ得ない人へ捧げ」（『室内生活』）なければならないのだ、と宣言する。また、「その時、あなたはすぐに神から逃げ出した／私も人類から逃げ出した」（『私を見て』）や、「風は私達が無から捏造した音だ／人類に代わって羊になる」（『風は従来から声を持ったことなどがない』）[44] など、これらは初期と違ってはっきりした転換が見せている。そして近年に至り、詩の『言い出すのはもう愛情ではない』[45] において、こうした神聖性の思考はピークになる。それは「あなたの名前には生だけがあり、死はない／私の命の長さを超えて／人類の言語を超えて／時間の限界を超えて」、「あなたは存在そのもの。秘密そのもの／炎よりも清らかで透き通り／ほこりよりも清潔で／発生しないことよりも原始的で／原始よりも沈黙的で／人の指紋と唇をちょっとも濡らさない」という。そして『残りは全部あなたのもの』では[46]、更に「私達は絶世の愛でノアの箱舟を造り、バラをオリーブの枝より前に芽を出させ／愛する人よ、今回の人類を耐え過ぎれば／……残りは全部あなたのものだ」というように、彼女の理想とした愛を示している。

こうした転換は、彼女の最初の個体としての存在から人類という集合概念の存在に昇華したことであり、人類生存の大背景の省察に入ったことになるのである。これは本来ならば深みのある超越であり、喜ばしい結果が生まれるはずである。しかし我々は、彼女がこうした昇華と同時に、知らず知らずのうちに自分まで神聖性の存在にしてしまうという幻覚の中に陥ってしまい、無意識の中で神の創世の企みを助長してしまっているのに気付くのであった。即ち「今、私は自分の身心を片付けてきれいにしている／ひとつの王朝が別の王朝を片付ける戦場のように／私はあなたを迎える準備をして、あなたを迎える為だけに……／私の神聖な君主／……登場して／……あなたを迎える為に、今の生を片付け終わった」（『出番』）である[47]。彼女はさらには自分を「精霊」、「天使」と空想し、自分を「あなたは人間世界の美女ではなく／一匹の蝶を追って偶然人間界に来たのだ／あなたは人間の存在の為にいるのではないのに／人間の悲哀の為に悲哀する」（『別人の賛美詩』）[48] というような存在で措定する。我々は彼女の転換後のこうし

44）同上、pp.12-13.
45）李见心『诗探索诗丛———李见心集』、太白文艺出版社、2007 年第 1 版。pp.17-19.
46）李见心『诗探索诗丛———李见心集』、太白文艺出版社、2007 年第 1 版。p.5.
47）同上、p.4.
48）同上、p.6.

た結果を望まないし、彼女が本当に、水辺に陥ってしまったあの美少年が自分に恋するあまり水仙の花になって、水（鏡）の中で生き続けたようにはなって欲しくないのである。

私は今までイブが禁断の果実を食べたのは蛇が唆したからだと思ったことはない。あれは人類自身の意志であり、また神が故意でやったことであるかもしれない。我々には実在の肉体と欲望を与えられているのであって、たとえ苦難を伴うとしても、自分の生命に属する快感を得てよいはずなのだ。神が完全な存在であるというのであれば、造物主が創造した世界の全ての生き物も完全であるはずだ。人は被創造者のひとつとしてこの世界に来たのであり、我々は最初から自分が心から愛する人に出会うことができ、造物主が与えてくれた生命を精一杯生きぬくべきである。しかし、多くの人が一生を流浪して自分の片割れを探し、それを見つけ出しても、往々にして条件が合わなかったり、能力が無かったりして身に得難い素晴らしさを獲得できずに終わっている。こうした現象と結果には二つの答えだけがある。一つは、神と呼ばれる造物主の不在である。さもなくんば、こうならないはずであろう。二つ目は、もし神の意志が存在するのであれば、人の全ての苦難は全て神の陰謀であるということだ。人が望んでも得られぬ片割れを故意に得させず、人に神を祀らせている。もしそうであれば、我々は神聖な存在を否定し自分の足で立って今を生きるか、でなければ、神の存在と完全を信じると同時に、自分が有限存在として完全でないという境遇を受け入れることが重要になってくる。故に我々は、李見心が現実の感情的境遇から神の視野へ進み、行き過ぎた感情と理想という存在しない世界に行って欲しくないのである。実際、李見心の感情理想は現代中国社会で生きる多くの女性を代弁している。言い換えれば、李見心は現代中国社会で生きる多くの女性の投影である。我々はいっそ、彼女が『羊の群れのような日々』ではっきりしたように、自分も無数の人類の一人であって、一匹の羊のように生き、平凡な日々に追われて、「私も草地にとどまるのが好き／草を食べて　けんかして　性愛を営む」のであり[49)]、「肉体を着ずにあなたを愛す」る世界に住むように、中世修道院の修道女のような生活を送るわけではないのだ。こうした願いがあるため、我々は絶対に李見心の生命審美をいきすぎた神聖性で解釈するべきではないし、もしそうしてしまったら、彼女は恋に迷った鏡の中につなぎ止められ、生まれ得ぬ人が来るのを一生の間夢の世界で氷のように冷たく待ち続けることになってしまう。

我々は女性としての李見心を見ることしかできないし、またそうしたいだけである。彼女は凡庸を恐れ、逆に普通の男性が求めるのは女性の凡庸さであるがゆえに、彼女は普通の男によって簡単に完成されうるものではないと運命づけられている。普通の男も

49）李见心『诗探索诗丛———李见心集』、太白文艺出版社、2007 年第 1 版。p.53.

彼女と一緒に肉体の渇望を埋め合わせることができるかもしれないが、これは彼女により大きな虚しさをもたらすだけであり、これによって彼女は自分のより深い「漏れ穴」（これは彼女がよく使うイメージである）を発見することになるのだ。彼女は神に、その永遠に生まれることのない存在に自分の企てることを完成させようとする。しかし、彼女は自分の人としての、肉体を持つ存在としての現実を忘れ去ることはできない。彼女の魂、彼女の精神は異性の媒介（たとえそれが神であっても男性であるはず）を必要としても、それよりも重要なことは、自分で女性として神聖さに対する度重なる過酷な要求から抜け出し、理想の歴史から現実の歴史の中へ歩み出し、今を生きる寛容さと体認を通して、自分の好きな蝶のような、また鏡の深いところのような夢を幻として自覚し、理想の拘りから現実の寛容へと成長して行き、だんだんと段階的な完成を遂げていくことしかないのである。

以上の李見心の作品で表現される審美傾向から見ると、彼女の全ての美意識は未だ現代主義の範疇にとどまり、エリート意識の束縛を打ち破っていない。現代主義の思潮と以前の浪漫主義、理性主義はみな専制、集権意識の産物であり、表現の仕方が異なるに過ぎない。李見心がたゆみなく自己を完成させ、魂の餓えをしのぎたいと思うのであれば、恐らくモダニズムに残留した凡庸を恐れる影の中から抜け出し、聖殿から降り出し、ポストモダンの意識へと向かわなければならないだろう。ポストモダンは平等社会から生まれたものであり、脱エリート主義の精神的核を持つため、たった今の日常の中に意義を見いだせるのだ。であれば、平凡と日常の価値を如何にして体得するか、そしてポストモダンの審美理想によって現実を再構成し、神聖性の中ではなく全ての事物や出会いの中から今の存在意義を探し出す、これが詩人李見心が自己完成に向かう重要課題であろう。また、豊かさを手に入れつつ現今の中國女性達に共通な問題でもあるのだ。